

がん予防の普及に関するヘルスコミュニケーション研究

○宮脇 みやわき 梨奈 りな (明治大学 文学部)

【はじめに】

がんは、1981年以降、死因の第1位であり続け、2人に1人が生涯で罹患すると推定されている。その一方で、がん検診による早期発見、生活習慣改善等の予防行動の有効性も示されている。しかし、がん検診受診率および推奨予防行動実施率は十分とはいえない。

私事だが、会社員生活を送る中で、(がん予防を含め)健康について正しい、または知っているという良い情報が十分に行き届いてないように感じていた。それがいつからか、どうすれば適切な健康情報を、効果的に、広く、分かりやすく普及できるのかを考えたいという思いに変わり、大学院へ進学した。そこから、今日まで進めてきた研究をがん予防にテーマを絞って報告したい。

【がん予防の認知に関する研究^{1,2)}】

そもそもがん予防は、どれくらいの国民に認知され、普及しているのか。そこで身体活動・運動実施の大腸がん・乳がんに対する予防効果の認知度について1,964名を対象に調査した。その結果、大腸がんでは約半数、乳がんでは約3割の認知度であり、十分でないことが示された。また、その認知には、年齢や教育歴に加え、情報取得が強い関連要因であることも明らかとなった。そこから、いかにがん予防の認知を向上させるか、そのための手段として、がん予防情報の普及をテーマに研究を進めていくことにした。

【がん予防情報の受信に関する研究³⁾】

諸外国における効果的ながん予防の普及に対する取り組みとして、欧米では、ヘルスコミュニケーション(健康増進に必要な情報を提供し、意思決定を支援する、コミュニケ

ーション戦略の研究と活用)が積極的に活用され、一定の効果を上げていた。

日本においても、このヘルスコミュニケーション戦略を構築する手がかりを得ようと、先行研究を参考にし、人々のがん情報およびがん予防情報の受信状況を検討する研究に着手した。20-69歳の男女3,058名を対象に調査をした結果、がん情報の取得者は46.7%で、さらに、がん予防情報に絞ると取得者はわずか10%前後(予防9.8%、検診16.9%)であった。その一方で、その約3倍の未取得者(予防34.0%、検診43.7%)が予防情報を得たいと回答し、がん予防情報へのニーズはあるが、取得者できている者は少ないというギャップが明らかとなった。また、主ながん情報源がマスメディアであることを確認したが、そのマスメディアの情報に対する信頼度が低いという課題も示された。

【がん予防情報の発信に関する研究³⁻⁵⁾】

受信に関する研究から、欧米での先行研究同様に、適切な情報発信となれば、日本でもマスメディアががん情報源として重要な役割を果たせる可能性が高いと考えた。そのため、情報の発信状況を把握するために、先行研究でも繰り返し用いられていた新聞記事の内容分析を行った。具体的には、中央5紙(読売、朝日、毎日、日経、産経新聞)1年間分(2011年発行)より、がんに関連する記事全5,314件を抽出し、がんは年間を通じて定期的に取り上げられていることを確認した。しかし内容分析を行った結果、がん局面的記載は1割以下で、その中でもがん予防に関する記事は、年間で300件にも満たなかった。さらに、予防関連記事の詳細を確認する

と、生活習慣に関する予防内容は少なかった。生活習慣については、がん予防となる行動の推奨基準や目安、がん検診については、対象年齢や受診間隔を示すものは数件で、記事として取り上げられていたとしても、行動変容・促進には不十分である可能性が示唆された。

【がん予防情報の効果的な発信の検討】

がん予防情報の現状を包括的に捉えると、受発信間にはギャップがあるといえる。がん予防情報へのニーズはあることから、主情報源のマスメディアから適切ながん予防情報（正しい具体的内容、行動を促すようなメッセージ等）を発信できれば、国民のニーズを満たすと同時に、がん予防行動を促せる可能性もある。

そこで、実際に情報を創出するマスメディア（新聞）関係者へのインタビューを実施した。そこから、新聞においては、がん予防には新規性や生活習慣病の中での特異性が低く発信自体を検討する機会が少ないこと、発信を想定してもいつ、何を、どのように発信すべきか判断が難しいということが課題のひとつだと確認できた。

また、いつ、何を、どのようにがん予防情報として発信するかを検討する材料として、国民の関心が高まり、情報発信に効果的なタイミングのひとつと考えられる著名人のがん罹患公表による影響について2,933名を対象に調査した。その結果、著名人のがん罹患公表に関する情報取得度は77.4%であり、がんに対する認識や知識、予防行動等との関係が確認され、それは印象に残ったメッセージによって異なる可能性も示唆された。

【まとめ】

ここまでこれまでの研究を報告してきたが、実はまだ、冒頭の「どうすれば健康情報を、効果的に、広く、分かりやすく普及でき

るのか」についての結論や、戦略構築には至っていない。今後も、現代の状況にあわせ、例えばWeb上の情報やWebでの情報探索行動等からも、適切で効果的な情報発信の検討やヘルスコミュニケーション戦略の構築を目指していきたい。さらに、実践の場としてある地域や学校でのがん予防の普及・啓発の効果についても検証していければと考えている。双方が融合していくことで、あらたながん予防を普及するためのヘルスコミュニケーションがうみ出せるかもしれないと期待している。

【謝辞】

在学時より多大なるご指導をいただきありがとうございます岡浩一朗先生（早稲田大学）はじめ、がん予防関連分野、ヘルスコミュニケーション関連分野にてご指導・ご助言を賜りました先生方、調査協力いただいた方々に、心より感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 宮脇 梨奈, 柴田 愛, 石井 香織, 他. 身体活動・運動実施による大腸がん予防効果の認知とその関連要因. 日本健康教育学会誌. 2014; 22(4): 297-305.
- 2) Miyawaki R, Shibata A, Ishii K, et al. Awareness and correlates of the role of physical activity in breast cancer prevention among Japanese women: results from an Internet-based cross-sectional survey. BMC Women's Health, 2014; 14:80.
- 3) Miyawaki R, Shibata A, Ishii K, et al. Obtaining information about cancer: prevalence and preferences among Japanese adults. BMC Public Health, 2015; 15:145.
- 4) Miyawaki R, Shibata A, Ishii K, et al. News coverage of cancer in Japanese newspapers: a content analysis. Health Communication, 2017; 32(4):420-426.
- 5) 宮脇梨奈, 石井香織, 柴田愛, 他. 新聞に掲載されたがん予防関連記事の内容分析. 日本公衆衛生雑誌, 2017; 64(2):85-94.

【略歴】

- 2014年 早稲田大学 スポーツ科学学術院 研究助手
2016年 早稲田大学 スポーツ科学研究科
博士課程修了
2017年 明治大学文学部 専任講師

(E-mail ; rina_miyawaki@meiji.ac.jp)